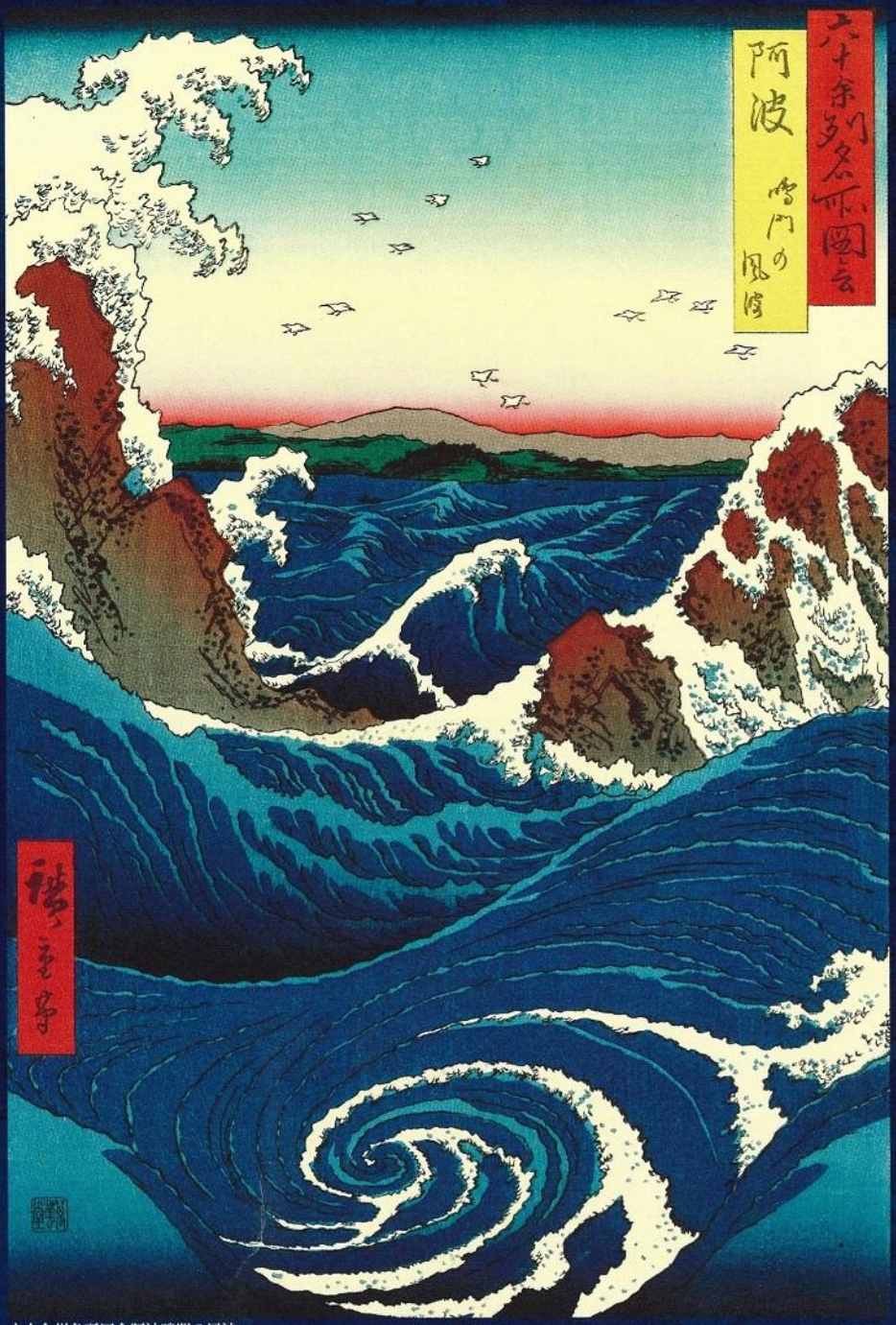
第48回企画展

岩村武勇 収集資料展



六十余州名所図会阿波鳴門の風波

阿淡年表秘録

2013年10月29日[火]—2014年1月26日[日]

徳島県立文書館 | 入場無料 |

開館時間：午前9時30分—午後5時

休館日：毎週月曜日、毎月第3木曜日(祝祭日と重なった場合は翌日)、年末年始(12月29日～1月4日)

展示解説：11月24日[日]・1月12日[日] 午後1時30分～

平成25年度とくしま教育の日事業　第15回徳島県民文化祭共催事業

剣山谷右衛門

文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 Tel.088-668-3700 Fax.088-668-7199 http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/

ごあいさつ

今回の企画展では、鳴門市鳴門町高島出身の教育者・郷土史家である故岩村武勇氏が、生涯をかけて収集された資料をご紹介いたします。文書館では、平成二十三年八月にご遺族の岩村公恵氏から岩村家資料の整理・活用を任せていただきました。生前、岩村氏が収集した資料は書庫二棟分、段ボール箱で四〇〇箱を超える膨大なものでした。現時点では整理作業が終わっていないため正確な点数は不明ですが、二万点は超えるものと思われます。

さて、岩村武勇氏は明治四十一年（一九〇八）現在の鳴門市鳴門町高島でお生まれになりました。昭和二年（一九二七）徳島師範学校を卒業後、教職の道に入り、戦前・戦中・戦後という社会の激動期に小学校教師を務め、昭和四十年（一九六五）撫養小学校長で退職するまで県教育界の重鎮として活躍されました。また、昭和五年（一九三〇）阿波郷土研究会（後の阿波郷土会の前身）の創立とともに入会され、郷土史研究に取り組む中で鳴門、徳島に関わるあらゆる資料の収集に精力を注がれました。その分野は、書籍はもとより、新聞、雑誌、古文書、絵画、写真、レコード、ポスター、広告、包み紙など多岐にわたります。

資料整理中のため、全体像の把握は今後の課題になりますが、徳島の歴史・文化研究にとって、多くの情報を提供してくれる貴重な資料群であることは間違いありません。岩村氏は、私財と余暇を資料の収集と保管のために惜しみなく使われたとうかがっています。古書店との取引も会津若松、東京、名古屋、大阪など広範囲にわたり、残された大量の目録からも、岩村氏の資料収集にかけた情熱が伝わってきます。

また、岩村氏は徳島県史、鳴門市史の執筆・編集を担当されるなど、多くの著作も残されています。今回は貴重な資料群の一端を紹介する速報展といったものにならざるを得ませんが、量的にも質的にもきわめて意義深い文化遺産であるということ、岩村氏が郷土史研究で大きな功績を残されたということをご理解いただく一助になればと考えています。

文書館では歴史的文化的価値を有する様々な資料を収集・保存し、県民の皆さまに利用していただくことを業務の柱の一つとしており、それぞれの地域で大切に伝えられた資料から学ぶことで、地域の活性化や課題解決にもつながると考えています。岩村氏の収集した資料群は個人的なものとしては希有な例ですが、日常生活の中の各種記録資料の保存について数十年、数百年後の将来を見据えて考える機会になればと思います。

なお、今回の企画展の開催にあたり、岩村公恵氏をはじめ関係者の皆さまから格別のご協力をいただきました。末尾ながら厚くお礼を申し上げます。

平成二十五年十月二十九日

徳島県立文書館長　結城　孝典

岩村武勇氏について

岩村武勇は、明治四十一年（一九〇八）現在の鳴門市鳴門町高島という、鳴門一番の産業であった塩業の中心地に生まれ、徳島県師範学校を卒業し、教師の道に進んだ。昭和十七年（一九四二）わずか三十四才で松茂国民学校の校長となり、戦後、昭和二十三年地元である撫養小学校の校長となり、昭和四十年に退職するまで十七年間、同校の校長職にあった。また昭和五年（一九三〇）阿波郷土会が創立すると共に会員となり、昭和十五年に上梓した『教育勅語と徳島県』を始め、郷土の歴史研究を行うと共に、歴史資料としての文献を収集し始めた。退職後の昭和四十三年に上梓された『徳島県歴史写真集』は教師として、また郷土史家としての集大成とも言える一冊である。

徳島に関わる郷土資料を幅広く収集していたが、特に地元である鳴門に関する資料や、お抱え力士を多く持ち、明治期に至るまで相撲王国とまで言われた徳島藩の相撲に関する資料の収集には力が入っていたものと思われる。一九七一年（昭和四十六年）に徳島県相撲連盟が刊行した『阿波相撲史』歴史編の監修も行っている。

相撲絵『陣幕』　勝川春亭 画

岩村武勇氏略年譜

明治41年（1908）　3月15日、徳島県板野郡鳴門村高島331番地で誕生。
大正14年（1925）　徳島県立撫養中学校（現鳴門高等学校）を卒業。
昭和２年（1927）　徳島県師範学校専攻課を卒業。
　　徳島県女子師範学校訓導兼助任尋常高等小学校訓導に任じられる。
　　歩兵第43連隊に入営する。（短期現役兵）
昭和５年（1930）　阿波郷土会が創立し、入会する。
昭和14年（1939）　撫養尋常高等小学校訓導に補せられる。
昭和15年（1940）　徳島県教育会から徳島県郷土史編纂委員を委嘱される。
　　『教育勅語と徳島県』を自費出版する。
昭和17年（1942）　松茂国民学校長に補せられる。松茂幼稚園長を兼任する。
昭和18年（1943）　岩村武勇著　翼賛叢書『4新田邦光』『5矢野茂』が発行される。
昭和19年（1944）　岩村武勇著　翼賛叢書『6梅林孝次』『9高橋赫一』が発行される。
昭和20年（1945）　鳴門町鳴門西国民学校長に補せられる。成稔幼稚園長を兼任する。
昭和23年（1948）　撫養小学校長に補せられる。撫養幼稚園長を兼務する。
昭和28年（1953）　岩村武勇著　『祖父の聞書　昔の高島』を自費出版する。
昭和30年（1955）　『撫養小学校沿革史』を発行。
昭和35年（1960）　徳島県史編さん委員会専門委員を委嘱される。
昭和37年（1962）　鳴門市小学校長会会長に就任。
　　岩村武勇著　『国立公園鳴門』を発行。
昭和40年（1965）　撫養小学校長を退職。
昭和42年（1967）　「岩村武勇先生」刊行会編『岩村武勇先生』を発行。
　　鳴門市史編纂委員を委嘱される。
昭和43年（1968）　岩村武勇著　『徳島県歴史写真集』を発行。
昭和44年（1969）　岩村武勇・岩村富夫著『明治徳島県官員職員録』を発行。
昭和53年（1978）　岩村武勇先生祝寿記念会『岩村武勇先生著述目録と風格』を発行。
昭和59年（1984）　1月25日、没。享年76才。

ベニョフスキーの『回想と旅行記』

ベニョフスキー肖像画
（『回想と旅行記』より）

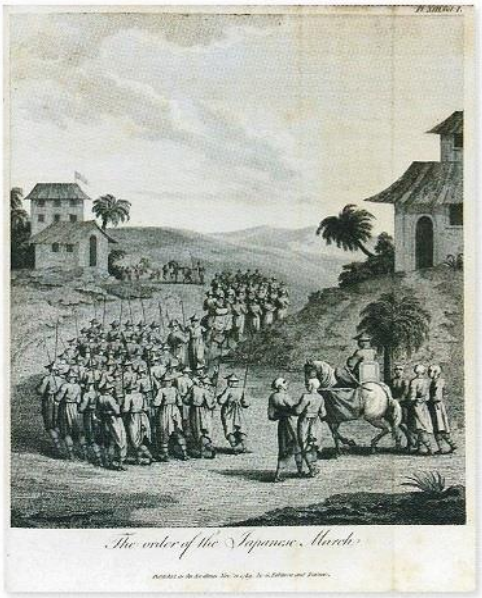
明和八年（一七七一）六月、一隻の異国船が海部郡日和佐浦（現美波町）の恵比須浜に漂着した。この船を率いていたのが、自称ハンガリー貴族のベニョフスキー（一七四六～八六）である。ポーランドの内戦に参加してロシア軍の捕虜となった彼は、仲間と共にカムチャツカの流刑地を脱走し、船を奪っての逃走中であった。日和佐浦の前には千島列島や土佐国佐喜浜（現高知県室戸市）にも寄港している。

一報を受けた徳島藩は、城下から鉄砲組を派遣するなどの警戒態勢を敷いた。ベニョフスキーは徳島藩側の制止を無視して強引に出港。番船として動員されていた地元の漁船群が阻止しようとしたが、〝石火矢〟を放ちながらこれを振り切って沖合へと消えていった。これが徳島藩にとっての最初の本格的異国船漂着事件とされている。

日和佐浦を出た後に、ベニョフスキーは奄美大島や台湾などを経由して最終的にマカオに到着している。その途上で、彼はロシアの脅威を誇張したオランダ人宛の書簡を出し、これが日本の海防論に大きな影響を与えることになる。

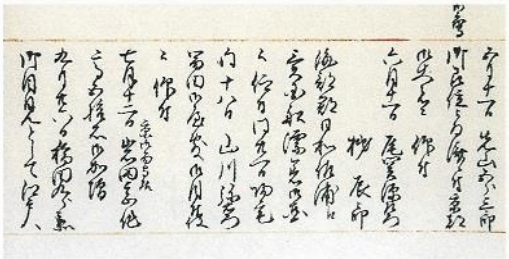
ヨーロッパへの帰還を果たした彼は、フランス政府の後援でマダガスカル征服などを企てて失敗する。その後、アメリカで新たなスポンサーを獲得した彼は再度マダガスカルに渡航し、一七八六年に彼を捕らえにきたフランス軍との戦闘中に波瀾万丈の生涯を終える。

ベニョフスキーが生前にフランス語で書いていた『マウリティウス・アウグストゥス・ド・ベニョフスキー伯爵の回想と旅行記』は、一七九〇年にまず英語版が、続いてフランス語版が出版され、その後も多くの国で出版が続いている。虚言と誇張に満ちたこの『回想と旅行記』はベストセラーとなり、彼を題材とする戯曲やオペラが創作されるなど一躍時の人となっていった。



「日本人の行進の図」（『回想と旅行記』より）

MEMOIRS AND TRAVELS OF MAURITIUS AUGUSTUS COUNT DE BENYOWSKY
（マウリティウス・アウグストゥス・ド・ベニョフスキー伯爵の回想と旅行記）1790年に刊行された英語版。



異国船への対応のため鉄砲組頭の尾関源左衛門と梯辰郎が日和佐浦に派遣されている。（『阿淡年表秘録　七』より）

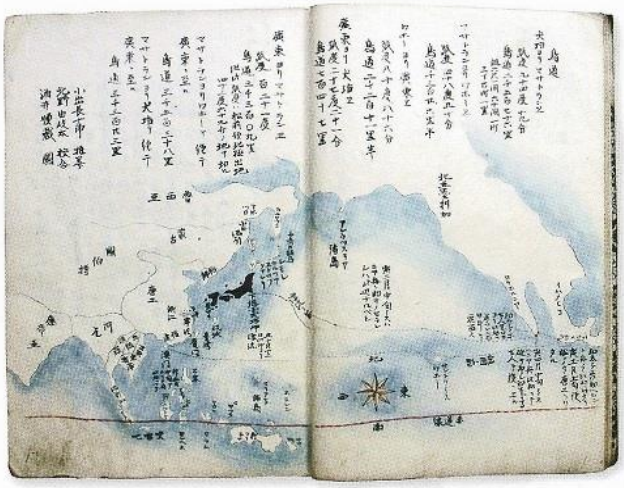
鎖国体制下の漂流民・初太郎 ―『亜墨新話』より―

岩村武勇氏収集資料には鳴門に関する海難事故の資料も多い。鳴門市高島の弥兵衛が文化六年（一八〇九）に遭難し台湾に流れ着いた事件（『阿州高島村弥平衛漂流』）、同じく鳴門撫養の天野屋所有「幸宝丸」が、弘化元年（一八四四）鳥島に漂着しアメリカ船に救われた事件（『阿波国幸宝丸漂流記』）、さらに天保十二年（一八四一）撫養の百姓・初太郎らがスペイン船に救助されカリフォルニア半島まで連れて行かれ、中国経由で三年後に長崎に帰ってくる「初太郎漂流事件」などがある。とりわけ初太郎関連の資料は多く『亜墨新話』（題箋無し）『海外異聞一～五』『初太郎漂流図記　完』『板野郡岡崎村初太郎メリカ江漂流以来の雑話を聞書』『亜墨竹枝』など数多く収集されている。

『亜墨新話』によると天保十二年八月二十三日、初太郎ら十三名は「永住丸」（千二百石積、八端帆）に乗り込んで、奥州に向けて兵庫を出帆するが犬吠崎沖で遭難し四ヶ月ほど漂流の後、翌年二月中旬頃イスパニア船に救助されメキシコ領カリフォルニアまで連れていかれ、その地で二〇〇日ほど丁重に扱われつつ留まっている。しかし望郷の念絶ちがたく、マサトラン（出帆の港）の人たちの温かい援助を受けハワイ・マカオ・ニンポー・乍浦（ジャホ）を経由し、天保十四年十二月三日長崎に帰国し、翌年八月二十一日に徳島に帰っている。この初太郎の体験は藩命により詳細に書き残された。

サンホセでお世話になったミゲリ・チョウサの家

メキシコ領マサトランよりマカオへ渡った時の船



漂流より帰国までの道のり

序文には天保十五年（一八四四）八月清国より護送された初太郎を斉藤惟祐（藩士）が受取にいったこと。大公（斉昌）の命を受け前川文蔵（藩士・儒学者）、酒井貞輝（水主から藩士取立て）がその見聞をまとめ、挿絵は守住定輝が描いたこと。さらに小出長十郎（藩士・数学者）が経緯度数の説により訂正・推算し十月に藩の儒学者・那波希顔が提出したことが記されている。（なお、藩命を受け完成された『亜墨新話』は全四巻であるが、収集資料には第三巻と、四巻の一部がなく現地の地理・気候・言語・風俗などが欠落している。）

『阿淡年表秘録』

天正十三年（一五八五）から天保十四年（一八四三）までの二百五十八年余にわたる編年体の年表。跋文によると、編者の藩士中山茂純が天保六年（一八三五）秋に参勤交代で藩主蜂須賀斉昌に供奉し江戸在番中に藩主の命により本書の編纂に着手、弘化二年（一八四五）に献上後、漏れたものを補い、さらに斉昌の隠居までを追加し、嘉永四年（一八五一）十二月に完成したものである。歴代藩主の諸士・寺院・町人・百姓等への触書、家中諸士系図・記録、そして、『渭水聞見録』『阿陽忠功伝』などを参考史料として編纂したものである。

本書は、藩主ごとに項を新しくし、巻一に家政・至鎮、巻二に忠英、巻三に光隆・綱通、巻四に綱矩、巻五に宗員・宗英、巻六に宗鎮・至央・重喜、巻七に治昭、巻八・九に斉昌と都合九冊よりなる写本である。内容は、幕府と藩主の事項等を「上ノ部」、蜂須賀家一門・家臣の身分役職等を「御連枝・御家老諸士・諸御役」、法令・土木・財政等を「制令・御普請・金銀」、藩士および江戸・京都・大坂・他藩の事件や災異等を「雑事」と区分けし、編年的に叙述している。

『阿淡年表秘録』（表紙）

『阿淡年表秘録』は、現在、本書（九冊）と徳島県立図書館本（巻一・七欠の六冊）、四国大学凌霄文庫本（十冊）の三種が確認されている。大きな違いは、綱矩代の記事が岩村本では一冊に、他では二冊に収められていることである。県立図書館本と凌霄文庫本は近似しており、すでに『徳島県史料第一巻―阿淡年表秘録―』として刊行されている。なお、徳島県立図書館本は年号欄に藩主の動静等が書き加えられていることから、凌霄文庫本の下書きと思われる。三種の本にはそれぞれ加筆・削除があり、すべてを比較しながら見ていく必要がある。

『阿淡年表秘録』（本文）

『阿陽忠功伝』

蜂須賀氏の系図、諸役旧制、天文期（一五三二～五五）から延宝三年（一六七五）までの蜂須賀正勝以来歴代藩主等の軍功・事蹟・忠功・事件・法令などを集成記録したもの。享保十七年（一七三二）の持明院建治寺の僧普雄の序があり、藩士西岡岑久が勤務の傍ら三十余歳のころに編纂したことが分かる。本書は全十二巻（七冊）からなる写本である。

『阿陽忠功伝』は、現在、本書と徳島県立図書館本（十二巻六冊）、四国大学凌霄文庫本（十二巻六冊）の三種が確認されている。徳島県立図書館本には「阿波国文庫」の印があり、蜂須賀家旧蔵本である。本書の第一巻から第十巻までの五冊は、この蜂須賀家旧蔵本と字配り・丁数とも全く同じである。ただし、第十一巻（一冊）、第十二巻（一冊）は、紙質・書体・寸法等が異なり、全く別物の写本である。

『阿陽忠功伝』（表紙）

『粟拾穂集』と『渭水聞見録』

◉『粟拾穂集』　二十一巻 四冊
◉『粟拾穂集後編』二十三巻 三冊

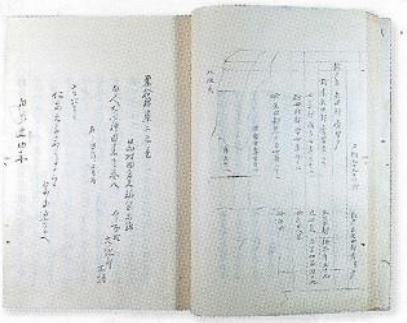
学問としての歴史は、古い記録・文献にあたることから始まる。原本である史料にあたることができれば最良であるが、原本が失われたり、遠方に存在していたり秘蔵されていることもあり、見ることが叶わないこともある。こうしたときには、古文献を集めた史料集が貴重であるが、写本の場合写すときに誤記や誤読の問題がある。その問題を最小にするために行われた仕事が模写である。徳島の古文献を最初に模写し『粟拾穂集』二十一巻を作成したのが徳島藩士の佐和直縄である。

『粟拾穂集』(表紙)

『粟拾穂集後編』(表紙)

佐和家の成立書によれば佐和直縄は、百七十石取りの藩士佐和家の四代目で、文化五年（一八〇八）に親市郎兵衛の隠居により家督相続し、書付入御土蔵番、学問処奉行、御蔵奉行勘定方などを歴任しており、学問や藩の持つ古文書に近いところの役目にあった。嘉永元年には隠居している。小杉榲邨は『阿波国徴古雑抄』の自序で佐和直縄が文政・天保年間に神社や旧家を回り古文書・古記録・棟札などを模写し、集め歩いたと書いているが、こうした役儀の合間に行っていたのであろうか。

飯田義資は『粟の抜穂』に、佐和直縄の学統・年齢などは不明であると書いているが、『粟の落穂』を編纂した野口年長、『古文書集』を編纂した池辺真榛、『阿波国徴古雑抄』を編纂した小杉榲邨等に与えた影響は深いと言えるだろう。


『粟拾穂集』一冊
欠損しているところも含めて模写している。

◉『渭水聞見録』四冊

蜂須賀正利に始まる蜂須賀家の成立と徳島藩主歴代の事暦を七代宗員の逝去にいたるまでを記した編年体の歴史書。飯田義資『粟の抜穂』によれば多くの藩士の家には、この本の写本があり、明治・大正の頃には随所にあって稀覯本ではなかったが、昭和二十年の戦災により多くが焼失したため、入手が難しくなったとしている。

『渭水聞見録』(表紙)

『渭水聞見録』の著者は、徳島藩儒の増田立軒である。立軒は、延宝元年（一六七三）徳島藩医増田策庵の次男に生まれ、京都に出て中村惕斎に学び高弟となった。宝永五年（一七〇八）藩主綱矩公より徳島藩儒に任用され、藩主侍講を務め、歴代藩主の年譜を編集している。自序によれば、元文元年（一七三六）に家蔵書として上梓し、家に秘蔵して世に広めることを戒めている。

『渭水聞見録』阿波国が蜂須賀家に与えられたことが書かれている。

展　示　資　料　一　覧

No.	表　題	年　代	備　考
1. 郷土史研究家岩村武勇と鳴門			
1	岩村武勇著『鳴門』	昭和23年(1948)	岩村家資料
2	岩村武勇著『昔の高島』	昭和28年(1953)	岩村家資料
3	岩村武勇著『国立鳴門公園』	昭和37年(1962)	岩村家資料
4	岩村武勇著『徳島県歴史写真集』	昭和43年(1968)	岩村家資料
5	岩村武勇先生の著述と風格	昭和53年(1978)	岩村家資料
6	岩村武勇氏写真パネル		岩村家資料
7	浮世絵「六十余州名所図会　阿波鳴門の風波」		大12-517
8	浮世絵「諸国名所百景　阿波鳴門真景」		大12-519
9	世界無類阿波名物大凧一覧表		大1-74
10	凧合一覧　鳴門土産額面用	大正12年(1923)	大1-77
2. 徳島の相撲史研究			
11	相撲絵　勧進大相撲取組之図	(明治)	大15-643
12	相撲絵　阿州陣幕嶋之助	寛政９年(1797)	大10-450
13	相撲絵　阿州陣幕久五郎	万延元年(1860)	大15-648
14	相撲絵　阿州大鳴門灘右衛門		大15-649
15	相撲絵　剣山谷右衛門		大15-650
16	相撲絵　小柳常吉		大16-703
17	大相撲関取双六		大16-738
18	相撲起顯初集10冊	天保９年(1838)	イワム00410～419
19	相撲金剛伝	嘉永６年(1853)	岩村家資料
20	阿波相撲史　徳島シリーズ1	昭和46年(1971)	岩村家資料
3. ベニョフスキーの「回想と旅行記」			
21	MEMOIRS AND TRAVELS OF MAURITIUS AUGUSTUS COUNT DE BENYOWSKY (マウリティウス・アウグストゥス・ド・ベニョフスキー伯爵の回想と旅行記・英語版)	1790年	岩村家資料
22	VOYAGES ET MÉMOIRES DE MAURICE—AUGUSUTE COMTE DE BENYOWSKY (モーリス・オーギュスト・ド・ベニョフスキー伯爵の航海と回想記・フランス語版)	1791年	岩村家資料
4. 初太郎漂流記			
23	(「亜墨新話」)3冊	天保15年(1844)	イワム00266～268
24	「海外異聞」5冊	嘉永７年(1854)	イワム00255～259
25	「亜墨竹枝」	弘化３年(1846)	イワム00263
5. 徳島藩の編纂物①　阿淡年表秘録ほか			
26	阿淡年表秘録(写本)9冊	嘉永４年(1851)	イワム01688～1696
27	阿陽忠功伝(写本)7冊	享保17年(1732)	イワム01386～1392
28	蜂須賀家由緒記(写本)	寛永18年(1641)	イワム00294
29	蜂須賀家用武具図解(写本)		イワム00293
6. 徳島藩の編纂物②　粟拾穂集ほか			
30	粟拾穂集(写本)5冊	天保12年(1841)	イワム01637～1643
31	渭水聞見録(写本)4冊	元文元年(1736)	イワム00495～498
32	渭水聞見録(写本)4冊	元文元年(1736)	イワム01076～1079

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

自宅の書庫の前に立つ岩村武勇氏

第四十八回　企画展
岩村武勇
収集資料展
平成二十五年十月二十九日　発行

編集・発行　徳島県立文書館
〒七七〇―八〇七〇　徳島市八万町向寺山
電話　〇八八(六六八)三七〇〇

印刷　徳島県教育印刷株式会社
〒七七〇―〇八七三　徳島市東沖洲二丁目一―一三
電話　〇八八(六六四)六七七六